

農学生命科学部 第16回 研究推進セミナー

【第32回 発生・生殖生物学研究室コロキウム 共催】

【新学術領域研究 配偶子産生制御 共催】

精子形態と運動の適応的進化と体内受精の成立

演者：渡邊 明彦 先生
山形大学理学部理学科 教授

日時：平成29年11月16日（月）

17:40～19:10

場所：弘前大学農学生命科学部403室

アカハライモリの精子：軸糸は波動膜の中にある。



脊椎動物は約4億年前に陸上進出し、様々な環境下で生殖を繰り返してきました。体内受精は陸生の脊椎動物が共通して行う受精様式で、陸上での世代交代に大きく貢献しています。この受精様式は、脊椎動物では両生類において、体外受精から進化的に獲得されたと考えられています。しかし、体内受精がどのようにして獲得されたのかは不明です。

精子は形態が種によって極めて多様な細胞で、この特徴は両生類で特に顕著です。両生類精子の形態が特に多様である理由は長い間ナゾでしたが、最近、形態に基づいたユニークな精子の運動とその調節が種に特異的な受精環境に適応して受精の重要な成立要因となっていることが示唆されています。本セミナーでは、両生類における体内受精の獲得と精子の形態/運動の環境適応との関連性について、私たちが進めている研究を紹介します。

主催：農学生命科学部生物学科 発生・生殖生物学研究室
小林一也（内線3587 kobkyram@hirosaki-u.ac.jp）

共催：研究推進委員会 学部後援会